

異音同表記語

—その種類と問題点—

大島中正

キーワード：文字・表記，同表記語，語形のゆれ，説明読み，日本語教育

1. はじめに

日本語の学習をはじめたばかりの中国語話者による作文に、次のような文があった。これは、誤表現であろうか。

(1) きのう、わたしは、書店で書を買いました。

誤表現を、「訂正をしなければ、その言語（ここでは日本語）を母語とする一般の成人に理解されないような表現」とするならば、(1)は、誤表現ということにはならないであろう。しかし、「表現主体（ここでは書き手）が意図したとおりに理解されない表現」をも誤表現とするならば、(1)は誤表現ということになる。なぜならば、書き手は「キノー、ワタシワ、ホンヤデホンヲカイマシタ。」という文を書いたつもりであったからである。「書店」および「書」は、書き手がその母語である中国語の単語を日本語に持ち込んだものであろうと私は考え、書き手に、この文を音読させてみた。その結果、書き手が文字化しようとしていた文の本来の姿が判明したのである。これは、単語が漢字で表記されることによって誤解が生じ、その誤解にもとづいて誤表現が生まれ、その誤表現がさらに誤解され得る好例である。

書き手が外国人でなくとも、漢字表記語が誤解されることがある。(2)は、有名な、川端康成の『雪国』の冒頭の文である。

(2) 国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。

漢字表記語「国境」の語形が /kunuzakai/ か /koQkjoV'/ かは判定しがたいとしかいえないであろう。川端が /kunuzakai/ のつもりであったのであれば、/koQkjoV'/ と読んだのでは誤解したことになる。その逆もしかりである。森本獲・平山三男編著

『注釈 遺稿「雪国抄」・「住吉」連作』（1984 林道舎）に掲載された「雪国抄」の脚注には、「音と訓の二通りの読み方がある。」とあり、補注（同書85頁）には、「長谷川泉・武田勝彦らは『くにざかい』と読み、鳥羽徹哉は『こっきょう』と読む。二説は共に納得でき、互に他を凌駕するものではなく、読者それぞれの語感に従って読めばよい。」とある。小学館『日本国語大辞典』は、「こっきょう」の項の用例の1つとしてこの文を採用し、「くにざかい」の項の用例としては採用していない。一方、玉村文郎（1985）¹¹ は、『雪国』が「昭和10年発表の作品であるから、作家が普通に上越両国の境界にふさわしい語を選べば、『くにざかい』を採ると推定されること、また、この作家が生前の書き物・講演の中で何回か、自分は固い漢語は嫌いだと述べていることの2点」から、「くにざかい」がよかろうとしている。また、武部良明（1988）²¹ でも、「こっきょう」でなく、「くにざかい」であるとする旨の注記がある。私は、勤務先（同志社女子大学短期大学部）日本語日本文学科の2年次生253名に、この文をローマ字に翻訳させてみた。その結果、「くにざかい」と理解している学生が1名で、「こっきょう」または「くにざかい」と理解している学生が1名、他は全員「こっきょう」と理解していることがわかった。

本稿では、語形または語義において相違点が認められるにもかかわらず、漢字でもって表記すると表記形が同一になるような語群を「異音同表記語」と称することにして、それらの種類と問題点を明らかにしたい。「異音同表記語」について考察することは、現代日本語における漢字使用の功罪についての認識を深めることであり、ひいては、日本語という言語にふさわしい正書法を確立するために必要な基礎資料を提供することでもあろう。

2. 異音同表記語とは

異音同表記語とは、どのような関係にある単語のことかを、まず具体的に例示しておこう。複数の単語が与えられている場合に、それらが同語であるか異語（別語）であるかの判別は、いかなる種類の資料を対象にした語彙調査においても必要不可欠の作業である。その際に、重要な条件になるのは、語形と語義である。しかし、日本語においては、表記形、殊に漢字をもちいた表記形も無視するわけにはいかないであろう。漢字による表記形が同一であっても、異語である場合があり、逆に漢字による表

記形が違うからといって異語であると速断はできないからである。以下には、語形・語義・表記形の3つの条件によって判別される、各種の同語または異語のグループを概観する。異音同表記語を、そういった全体のなかでとらえておきたいからである。

語形と表記形については同・異の2点から、語義については同・類・異の3点からそれぞれ、単語間の異同の判別を行なうとすると、12通りの同語または異語のグループができることになる。以下に示すごとく、同語のグループが4組、異語のグループが8組存在する。

A. 同音同義同表記 〔同語〕

例は省略。

B. 同音同義異表記 〔同語〕

〈すし・鮎・寿司, 川原・河原, 陰謀・隠謀, 加担・荷担, 根源・根元, 神髄・真髄, 状況・情況, 太平・泰平, 表題・標題, ……〉

C. 同音類義同表記 〔同語〕

多義語を同一の表記形であらわした場合。

〈やま(に登る)・(試験の)やま, 高い(山)・高い(代金), (名前を)よぶ・(人を家に)よぶ, ……〉

D. 同音類義異表記 〔同語〕

〈異境・異郷, 実態・実体, 作成・作製, 反則・犯則, 泣く・鳴く, ……〉

E. 同音異義同表記 〔異語〕

同音異義語を仮名表記したような場合。

〈くも(雲)・くも(蜘蛛), まつ(松)・まつ(待つ), よく(良く)・よく(欲), ポーズ(pause)・ポーズ(pose), ……〉

F. 同音異義異表記 〔異語〕

〈とのお(十)・とう(党/塔/糖), 高利・公吏・功利, 射る・煎る・鑄る, 雁・狩り・カリ, 酔い・良い・余威, 代える・蛙, ……〉

G. 異音同義同表記 〔異語〕

〈私立(シリツ・わたくしリツ), 市立(シリツ・いちリツ), 化学(カガク・ばけガク), 事典(ジテン・ことテン), 来春(ライシュン・ライはる), 底本(テイホン・そこホン), 技手(ギシュ・ぎて), 他人事(ひとごと・タニンごと), 五

月雨(さみだれ・さつきあめ), 遺言(ユイゴン・イゲン・イゴン), 凶画(ズガ・トガ), 氏(うじ・シ), 一日(ついちち・イッぴ), 寝る(ねる・ぬる), ……>

H. 異音同義異表記〔異語〕

<むじな・たぬき・梯形・台形, 遊星・惑星, 投手・ピッチャー, ……>

I. 異音類義同表記〔異語〕

<一時(イチジ・イッとき・ひととき), 工場(コウジョウ・コウバ), 国境(コッキョウ・くにざかい), 今日(コンニチ・きょう), 市場(シジョウ・いちば), 草原(ソウゲン・くさはら), 足跡(ソクセキ・あしあと), 大事(ダイジ・おおごと), 父母(フボ・ちちはは), 牧場(ボクジョウ・まきば), ……>

J. 異音類義異表記〔異語〕

<あがる・のぼる, さける・よける, 重い・重たい, いま・現在, ……>

K. 異音異義同表記〔異語〕

<尾鰭(おひれ・おびれ), 一寸(ちよっと・イッスン), 十分(ジッポン・ジュウブン), 生物(なまもの・セイブツ), 来る(くる・きたる), 通って(とおって・かよって), ……>

L. 異音異義異表記〔異語〕

例は省略。

上記の各項について, 詳細な検討を加える余裕はないが, 今後, 計量的な調査等を行なう必要もあろう。

本稿でとりあげる異音同表記語とは, 上記のうちの, G「異音同義同表記異語」, I「異音類義同表記異語」, K「異音異義同表記異語」の3種類と, いわゆる語形のゆれとしてあつかわれる, 「愛想(アイソウ・アイソ), 試合(しあい・しやい), 発足(ホツソク・ハツソク), 消耗(ショウコウ・ショウモウ), ……」などの, 「類音同義同表記同語」とでもいうべきものを包括的にとらえたものである。G・I・Kの3種類は, 従来, 同表記語とか, 同表記異語とかよばれてきたものであるが, 漢字による表記形が同一であってもその語形において相違点が認められるものとして, 一括してとりあげることにする。特に, 外国語を母語とする者の日本語使用をも視野に入れて考察するには, このような視点を欠かすことができない。

3. 同表記異語の種類

前節において、同表記異語には、4種類のものがあることを確認した。本節では、各種類の特徴や問題点を指摘する。

G「異音同義同表記異語」の特徴としては、一方の語が説明読みによって生じたものがあることをあげることができる。説明読みとは、武部良明（1988）によると、「聞き手に理解しやすくするために、本来の字音読みの一部をわざわざ字訓読みに変えること⁸⁾」である。「市立」と「私立」は、同音異義異表記異語の典型的な例である。前者は「いちリツ」、後者は「わたくしリツ」という語形を得て、音声言語での同音による誤解を回避できるわけであるが、その結果として、異音同義同表記異語が生まれることになったのである。漢字音の有する短小性・同音性（あるいは類音性）の高さという弱点を、音訓転換の原理を活用して克服しようとしたわけである。しかし、その結果、語形を異にするものを文字言語において区別できなくなったのである。

「他人事（タニンごと）」は、「他人事（ひとごと）」の表記形を、また「五月雨（さつきあめ）」は「五月雨（さみだれ）」のそれを文字読みして生じた語であるといわれている。一種の綴り字発音によって生じた語である。漢字によってなる文字列と音列とが1対1に対応していないために、誤解・誤読によって生じたのである。誤解・誤読によって生じたという点では、類音同義同表記同語と共通するといえよう。

法令用語では、「遺言」は「イゴン」、「凶画」は「トガ」、「氏（うじ）」は「シ」、「借家」は「シャッカ」であるという。

いずれも日本語における漢字の音訓両面における多様性によって生じた語であるといえよう。

I「異音類義同表記異語」とK「異音異義同表記異語」とは、「類義」か「異義」かという点に違いがあるわけであるが、両者に連続性があることは認めておかなければなるまい。とはいうものの両者をはじめから一括してあつかうのにも躊躇を覚えるを得ない。「尾鱈（おひれ）」と「尾鱈（おびれ）」、「男女（ダンジョ）」と「男女（おとこおんな）」、「山川（やまかわ）」と「山川（やまがわ）」のように語構造が明らかに異なるものや、「来る（くる）」と「来る（きたる）」のように品詞の異なるものなどは、「異語」とよぶに最適のものであるという点を強調しておきたい。

なお、IまたはKに属する個々の語についてその成立を述べるべきであろうが、今後の課題とせざるを得ない。

4. 異音同表記語の判別

異音同表記語を判別するというのは、漢字表記語の語形を判定するというのである。一体、どのようにして語形の判定ができるようになってきているのか。判定主体を日本語を母語とする者（日本人）とそうでない者（外国人）とにわけて考えてみよう。

日本人の一般成人は、理解語彙・使用語彙ともにその量が、外国人（特に学習時間が数年の外国人）に比べて豊富であるといえる。したがって、日本人の一般成人にとっての異音同表記語の判別とは、たいていの場合、既知の語のなかからの選択にほかならない。問題の漢字表記語が自己にとって既知の語か否かを考えるということは、まずないといってよい。同音異義語の判別の場合と同様、共起語や文脈を手がかりとするのである。たとえば、「彼は、人気のない俳優だ。」における「人気」が「ニンキ」であって、「ひとけ」でないことは、「俳優」という被修飾成分によって判定される。「かにかくに祇園は恋し寝るときも枕の下を水の流るる」の「寝る」が「ぬる」であって「ねる」でないことは、この短歌が文語で詠まれていることによって判定されるのである。しかし、前後の文脈や状況が明らかであっても判定できないことがある。本稿の冒頭でとりあげた「国境」はその好例といえよう。「一時の辛抱だ。」の「一時」は、「イチジ」か、「イッとき」か。それとも「ひととき」であろうか。確言は避けねばなるまいが、I「異音類義同表記異語」に、判定の困難なものや判定の不可能なものが多くあるのではないだろうか。今後の調査のための仮説としたい。

外国人の場合は、その日本語のレベルによっては、日本人の一般成人と同様の方法で、判定ができることもあるが、先にも述べたように問題の漢字表記語の語形の確定が、既習の語彙でできるか否かが問題になるのである。目にした漢字表記語を読む場合ばかりではない。耳にした単語が既習のものか否かを判断しなければならないことも多い。いずれの場合においても彼らがとる方法は、日本人にたずねるか、手近の辞書を引くかであろう。

以下に示すのは、『品詞別・レベル別1万語語彙分類集』を資料にして、学習レベル別にどのような異音同表記語があるかを調べ、それらを抽出して、下位レベルから

順に列挙したものである。同書（6頁）によると、各学習レベルの内容は、下記のごとくである。

レベルA：日本語を勉強し始めてはぼ1年（学習時間1000時間程度）を経過した人の相当部分が到達しているであろう学習レベル。

レベルB：日本語を勉強し始めてから、6か月以上1年未満（学習時間700～800時間）の人の相当部分が到達しているであろう学習レベル。

レベルC：日本語を勉強し始めてから3か月以上6か月未満（学習時間400～500時間）の人の相当部分が到達しているであろう学習レベル。

I. 同じ学習レベルに分類されているもの

① 学習レベルCに分類されているもの

開く（あく・ひらく）	空く（あく・すく）
良い（いい・よい）	家（いえ・うち）
行き（いき・ゆき）	表（おもて・ヒョウ）
方（かた・ホウ）	金（かね・キン）
木（き・モク）	九（く・キュウ）
月（つき・ゲツ）	四（よん・シ）
十（とお・ジュウ）	水（みず・スイ）
背（せ・せい）	外（そと・ほか）
火（ひ・カ）	日（ひ・ニチ）
毎年（マイとし・マイネン）	

② 学習レベルBに分類されているもの

市場（いちば・シジョウ）	上下（うえした・ジョウゲ）
方々（かたがた・ホウボウ）	月日（つきひ・ガツピ）
球（たま・キュウ）	末（すえ・マツ）
生（なま・セイ）	世論（セロン・ヨロン）
都（みやこ・ト）	年月（としつき・ネンゲツ）
博士（ハカセ・ハクシ）	日日（ひび・ひニチ）
陸（おか・リク）	

③ 学習レベルAに分類されているもの

愛想 (アイソウ・アイソ) 心中 (シンジュウ・シンチュウ)
 節 (ふし・セツ) 重複 (チョウフク・ジュウフク)
 二重 (ふたえ・ニジュウ)

II. 異なる学習レベルに分類されているもの

④ 学習レベルCと学習レベルBとに分類されているもの

開ける (あけるC・ひらけるB) 音 (おとC・オンB)
 一昨日 (おとといC・イッサクジツB)
 一昨年 (おとしC・イッサクネンB)
 空 (そらC・からB) 昨日 (きのう・サクジツB)
 今日 (きょうC・コンニチB) 工場 (コウジョウC・コウバB)
 昨夜 (ゆうべC・サクヤB) 中 (なかC・チュウB)
 土 (ドC・つちB) 本 (ホンC・もとB)
 訳 (ヤクC・わけB) 夜 (よるC・よB)
 私 (わたしC・わたくしB) 間 (あいだC・まB・カンB)
 明日 (あしたC・あすB・ミョウニチB) 後 (あとC・ゴC・のちB)
 上 (うえC・かみB・ジョウB) 下 (したC・もとB・ゲB)

⑤ 学習レベルBと学習レベルAとに分類されているもの

値 (あたいB・ねA) 抱く (だくB・いだくA)
 市 (シB・いちA) 大家 (おおやB・タイカA)
 音 (オンB・ねA) 下 (ゲB・しもA)
 紅葉 (コウヨウB・もみじA) 根本 (コンボンB・ねもとA)
 質 (シツB・シチA) 品 (しなB・ヒンA)
 種 (たねB・シュA) 生物 (セイブツB・なまものA)
 度 (たびB・ドA) 面 (メンB・つらA)
 罰 (バツB・バチA) 綿 (メンB・わたA)
 下 (もとB・ゲB・しもA)

⑥ 学習レベルCと学習レベルAとに分類されるもの

明後日 (あさってC・ミョウゴニチA) 頭 (あたまC・かしらA)
 大勢 (おおぜいC・タイセイA) 音 (おとC・ねA)

魚 (さかなC・うおA)	下 (したC・しもA)
梅雨 (つゆC・バイウA)	床 (ゆかC・とこA)
角 (かどC・つのA・カクA)	

なお、単語のレベルと漢字のレベルは必ずしも一致しないが、ここでは、単語のレベルによる分類のみをとりあげた。

中国語話者や韓国語話者にとっては、日本語内の異音同表記語に加えて、彼らの母語と日本語との間にも異音同表記語があることは、周知の事実である。本稿冒頭の中国語話者による作文に見られたような誤用の起こることがあるのである。

5. 異音同表記語の解消方法

前節では、読み手の立場にある場合の問題について述べたが、本節では、その逆の立場にある場合の問題について述べる。すなわち、書き手の立場にあって、いかに読み手の誤解を防ぐかという問題をとりあげる。

1つには、同一の語を別の漢字で表記できないかを考えてみることがある。例えば、「十分」を「充分」に、「大業」を「大技」に、「黒子」を「黒衣」に表記形を改めるのである。しかし、「根本」は「根元」とすることで「コンボン」との区別は可能になるが、「コンゲン」との区別ができなくなる。「人事」は、「他人事」とすることで「ジンジ」と紛れなくなるが、あらたに「タニンごと」なる語が生まれることになるのである。

送り仮名によって、判別可能になることもある。例えば、「表す」は「表わす」と、多く送り仮名をつけることで「ヒョウす」との区別が可能になる。「来る」を「来たる」とし、「行って」を「行なって」とするのも同様である。しかし、「生物」は「生き物」とすることで「なまもの」、「セイブツ」との区別はできるが、依然として、「生物(なまもの)」と「生物(セイブツ)」との区別は、文字列のみではできないのである。

以上の2つの方法は、適用される語が多くはないが、語種による書き分けは、より広い範囲の語に適用できよう。もっとも、この方法にも限界がある。例えば、漢語を漢字で表記し、和語を仮名で記表することで、「セイブツ」と「なまもの」、「おひれ」と「おびれ」の区別は可能になるが、ともに漢語である「ライハイ」と「レイハ

イ]、「コウフ」と「クフウ」の区別は依然として不可能なのである。この方法であると、混種語が「工ば」「借や」といった混ぜ書きになり、読みにくくなったり、ワープロによる入力が面倒になったりする可能性がある。

残る方法は、振り仮名付きの表記形式を採用することであろう。大島(1991)でも、その点には言及したので、ここでは繰り返さないが、直列表記を並列表記に改めることで問題を解消するわけである。

しかし、異音同表記語の問題を根本的に解消するには、異音同表記語自体の使用をひかえ、別語による表現の可能性をさぐることも必要であろう。その点は、同音異義語や類音異義語の問題についても同様である。また、文章の漢字仮名交じり表記にのみ固執するのではなく、ローマ字による文章表記も試みられるべきである。少なくとも、この異音同表記語の問題は、それによって、解消するのである。

6. お わ り に

異音同表記語についての以上の序論的な考察によって、問題提起とする。今後は、多くの事例を収集し、どの漢字・どんな漢字によって異音同表記語が発生しやすいのかを明らかにしなければならない。さらには、判別方法・解消方法の両面についての詳細な記述を行なう必要もある。その成果は、「異音同表記語辞典」などの作成に生かされることになるにちがいない。語形・表記形の両面から検索可能な辞典ができれば、多くの外国人の渴をいやすであろう。そのためには、事例収集の一方で、国語辞典・日外辞典における異音同表記語の現行の記述における問題点をも明らかにしていかねばならない。

いずれも、今後の課題としたい。

注

- 1) 参考文献6の129頁参照。
- 2) 参考文献8の注の2)に、「川端康成の『雪国』の冒頭『国境の長いトンネル』は、群馬(上野)から新潟(越後)に抜ける清水トンネルだから、『くにざかい』のほうである。これを『こっきょう』と読むと、仏国境でアルプスの下を抜けるモンブランのトンネルになる。」とある。
- 3) 参考文献8の「7. 結語」参照。

参 考 文 献

1. 水谷静夫・松原順子・坪井美智子 (1971) 「同字異訓熟語集」『計量国語学』第58号
2. _____ (1972) 「同字異訓熟語集拾遺」『計量国語学』第60号
3. 相浦 晃 (1972) 「日中対照語彙論」(『日本語と日本語教育——語彙編——』所収) 文化庁
4. 西尾寅弥 (1983) 「語形のゆれ」『日本語学』第二巻第八号 明治書院
5. 金子尚一 (1985) 「単語の表記と漢字——漢字による単語の表記が問題になる原因について——」『国文学 解釈と鑑賞』第50巻3号 至文堂
6. 玉村文郎 (1985) 『日本語教育指導参考書13語彙の研究と教育(下)』国立国語研究所
7. 佐竹秀雄 (1987) 「2.2 表記辞書と仮名/漢字変換」『朝倉新日本語講座1 文字・表記と語構成』
8. 武部良明 (1988) 「二字漢字語の音訓読み分けについて」早稲田大学国文学会『国文学研究・94』(『文字表記と日本語教育』1991年, 凡人社に収載)
9. 玉村文郎 (1989) 「語形」『講座 日本語と日本語教育 第6巻日本語の語彙・意味(上)』明治書院所収)
10. 大島中正 (1991) 「語の漢字仮名並列表記は有用か——語彙教育とのかかわりにおいて——」『同志社女子大学日本語日本文学』第三号

参 照 資 料

『品詞別・レベル別1万語語彙分類集』1991年, 専門教育出版

(本学研究助手)